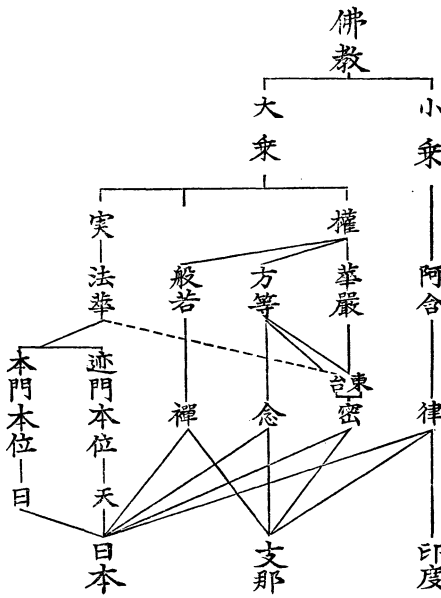
佛教史上に於ける日蓮教義の特色

清水龍山

三國佛教史を繙く者は何人も其哲學的教理の方面に、又其宗教的信仰の方面に、我日本佛教各宗の印度支那の其れに比して、非常な進歩發達變遷異同を認むべし。同時に我日蓮教義の百尺竿頭一歩を進め、否嶄然頭角を現し、殆ど全く印度產出、支那傳承の舊佛教に非ずして、聖日蓮創唱の新佛教即ち聖の謂ゆる「日本の佛法」なる風趣面目をも認むべし。余は今茲に聖誕七百年の嘉辰を迎へ聊か吾聖日蓮教義の佛教史とに於ける特色を述べんと欲して、(一)三國佛教の概觀、(二)日本佛教の特色、(三)我日蓮教義の發揮に及ばんとす。

一、三國佛教の教判上の位地



律宗も支那の南山の道宜の如きは、理想を大乘に置き、行儀を小乘に取る等と謂ふと雖も、大体に於て阿含小乘三藏の律藏に依れるものにして本朝天下の三戒壇の如き亦皆爾り。而して印度は此戒律佛教相應の國にして盛に流布せり。

密教には傳教(台密)弘法(東密)の二家ありて、前者は支那に於て已に天台の一行禪師が法華の教理を運用して彼大日經疏を造りたれば、其所釋の本典大日

經其れ自身は其說相に徵するに、四敎並說三乘得道の第三方等部の攝屬なれども、其釋疏に依れば法華敎理を混和しあるを以て、亦法華に判攝す。而して傳敎大師は法華勝大日劣、正依法華大日傍依なるに對して、弘法は大日勝法華劣、眞言第一華嚴第二、法華第三と判じて盛に華嚴敎理を運用して以て傳敎に對抗せり。

念佛には支那及本朝にも華嚴（本朝の融通念佛宗の如き）方等（同法然等の如き）並法華の觀念念佛（天台宗）又曇鸞、道綽、善導等の口稱念佛、且又本朝に於ても法然の單元的淨土三部經（方等部）の彌陀法と親鸞の複元的即ち法華の法、佛を運用融會したる念佛との異同あれども、今は其所依の本典に依りて、方等部に判攝す。

禪宗は自ら佛敎の總府と誇稱し、總じて一代佛敎を用捨し、別に所依の經典を局定せず等と言ふと雖も、其所詮の宗敎は般若空無相になるは復掩ふべからざるなり、若し道元の「正法眼藏」の如き中に方便品の諸法實相、又壽量品の六句の知見、我此土安穩の妙旨を說述することあるも、其究極猶是れ無相實相にして、未だ是れ具相有相の實相にあらず。故に彼家の空たる奪つて是を判すれば通敎の當体即空の偏空（全く假中を說かざる）にして、未だ別敎の但空（假中に即せざる）に及ばず。況や圓敎畢竟空（空假中の三諦融即、假中に即するの空）をや。本邦台門の古哲安然の禪を圓の空門の一邊なりと判せり。是れ稍高きに失するの嫌なきに非ざれども、安然の禪は或は許して可ならん、而も彼禪宗の禪は斷じて容すべからざるなり。

已上の諸宗中に於て唯傳敎大師の密敎のみは法華藥籠中の物として權實の判攝に一分法華圓實を含むと雖も自餘は絕無、悉く偏權に屬す。但し今言ふ所の台密とは、的しく傳敎の密を指す。若し彼慈覺、智證、安然に至りては、蚤く既に高祖以偏（禪戒密）助圓（法華）の本意を喪ひ、彼大日經と此今經と、意業所觀の一念三千の理は同じく、手（身業）に結ぶ印契と、口に唱ふる眞言とは（此二を事と云）彼勝なりなど傍正顚倒權實雜亂以て單に方等部に攝し、法

華經及び傳敎大師の獅子身虫を出すこと撰時鈔、下山鈔等の聖判の如し。右東台兩密及び傳敎大師と其以後又法然親鸞の異同等は拙著『法華經要義』の「三國傳弘史論」を參照せらさたし、今詳にするに遑なし。

最後に實大乘法華經の中に就て、像法時代に支那に天台、日本に傳敎出で、俱に天台法華圓宗を弘むと雖も、猶是迹門の理具實相、理の一念三千以て所觀の諦境として、三諦三觀觀念法行以て能觀の觀法と爲す。是即迹門立脚地の法華弘通にして、唯是れ像法適時即ち利根上機に適して末法根鈍障重の劣機は分を絕す。是に於てか、法然をして隙に乘じて、理深(法華)解(機根)微(劣微)非機失時等の謗法を敢てせしむる所以なり。蓋し迹化の弘經は此評破を免る、能はざるを奈せん。

然り而して法華經果して是の如きものなり耶。是れ本化大士が圓實本門立脚地の事の一念三千三大秘法即ち事(手に印契の總体たる合掌印を結び、口に諸佛の秘密呪なる題目を唱ふ即ち身口二業也)理(意業事の一念三千の理を信觀す)俱密の最勝眞實の妙法を建てて、彼密家偏權の三密の邪憧を倒せし所以なり。而して此大法は實に三國三時未だ曾て有らざる所也。此天台と吾祖との法華觀の異同亦粗『法華經要義』の如し。

之を要するに三國の佛敎を概觀するに、印度は小乘阿含三藏敎　三藏の中にも戒律中心の佛敎、支那は權大乘、日本も傳敎大師以前は權大乘、大師は實大乘而も猶未だ法華經の迹門中心なりしを、我本化大聖人に至りて方めて本門法華經を唱道せられたるなり。

三國佛敎の敎判上に於ける位地略して是の如し。

而して其敎理の傾向及其修行の實際は

學問的—理想的—消極的　出世間的——印度
宗敎的—實際的—積極的　非國家的——支那
觀念的—貴族的—部分的(主として支那佛敎による)
信仰的—平民的—普遍的　世間的——日本
國家的

と分類せらるることは敢て辨を俟たずして讀者の首肯せらる、所なるべし。但し學問的、理想的、

消極的、觀念的、部分的、貴族的、出世間的、非國家的は獨り印支のみならず、日本も我日蓮教義より批判すれば亦此攝屬を免かれず、後の日蓮教義の特色の下に辨ぜん。三國佛教の異同比較概觀略して是の如し。次に特に日本佛教の特色を述べん。（嗣出）

鎌倉殿中問答考（承前）

當時問答の狀況を記して曰く「斯外伺候ノ大名諸士百司磨肩ヲ屈膝ヲ而列座ス凡ッ貴賤上下道俗男女來會スル「宛カ如ク雲霞ノ門前成レ群ヲ良ニ希代ノ壯觀也（略注十一左）」「鎌倉中の寺院は不ニ申及一三浦三崎金崎六ッ、浦津々浦々近國は駿河甲斐伊豆武藏の寺々に申付僧俗男女聽聞御免の由所仰付也」（余寫本）

印師一度場に臨むや、獅子王の勢をなし、大乘の幡を差上、身には忍辱の衣を着し、手には妙法五字の利劍を提げ、正直捨權の弓を張り、邪正一如の矢を番ひ、爾前權門を打破り、智解辨舌縱横無盡、恰も富樓那の無礙辨の如く、大風の雜草を靡かすが如く、善く法華折伏破權門理を示し給ふ、而して三度の論難正に印師の勝利に歸するや、寺社奉行大膳大夫自ら宗牒を與へ四箇名言を許可す印師答曰く「四箇の名言今更御免無くとも、少しも憚るなし、先年高祖大士佐渡より赦免の時、放光寺時宗公より宗牒を下し置かる、（本化高祖傳下十一、別統大、二八諸三四、攻中五一）今新に申す事御無用也」と。

又朗尊身は松葉ケ谷草庵に居し給ふと雖も、此度の問答は前代未有の大事、初の仰の如く、些細の失過もあらば、忽ち流島刑架のみならず、一宗門の關ケ原、宗祖末代、出現の本懷も唐捐ならしむと、乃ち老軀の御身を杖に扶けられ、群集の間にありて、問答を窺ふ、口には經文を誦し、心には諸佛菩薩を祈念し專念に勝利を希ふ、然るに幸なる哉、初中後印師の利となりしかば、喜悅滿面、互に顏を合せし、嬉し泪に御法衣の袖を絞り給ひ踊躍して手づから、印師の履物を直し給ふ、印師驚き且つ固辭する事再三、世の諺にも七尺去つて